

桂下老人之墓

我〇けは涼しき国に夏の月

(裏面)

男 大布 建

門人 某等 建

敦賀の墓碑(一)

小林 敏

重世墓

(正面) 享保十五庚戌年三月二十三日卒

伊吹重世之墓

(裏面)

門人某等 建之

浄教妙教墓

(正面)

积 浄教

积 尼妙教

(裏面)

积 浄空

积 貞春

得 聞

(左側面)

華林月蟾信女

妙教之姥

(右側面)

明和壬辰十一月立

伊吹氏之墓

東恕墓

(正面) 享保十九年甲寅年夏四月三日卒

伊吹家墓
松尾芭蕉が「おくのほそ道」北陸行脚のとき、敦賀にも足跡をとどめて、貴重な文化遺産を今に伝えている。

芭蕉の没後、その門下が各地で蕉風俳諧の普及に努めた。敦賀においては伊吹藤左衛門の俳号桂下園東恕が、各務支考(美濃派)の影響をうけて、敦賀における美濃派の祖ともいべき俳人である。

著書に「俳諧四幅対」などがあり、琵琶、東吾など、多くの門人もいたと思われる。

東恕は享保十九年四月三日に没しているが、その伊吹家の墓石が松島町来迎寺野にある。

東恕、重世墓は、ほぼ同じ大きさの自然石が用いられ、東恕墓には変体仮名混じりの辞世の句「わが影」が刻まれて、裏に子息大布の名がある。

大布の名は『東恕終焉記』に、「明くれば二日息の大布に硯紙をもたせ」と、辞世の句をしたためている。すでもう一人の子息である紀白は今はなく、後々を大布に託していたのであろうか。

伊吹重世墓は、享保二十年七月に東恕門下の柳華園東吾によって刊行された『わが影』の「東恕終焉記」に見える東恕の子息であり、俳人でもあった紀白ではないかと思われる。

それは同書に「五とせさきの春ならん、息の紀白をうしなひ、断腸のおもひに」と、子息を失った父東恕のなげき悲しむ記述がある。

東恕が没した同十九年に、東吾がこの終焉記を起稿したとすれば、「五とせさきの春ならん」は、墓石の同十五年三月と一致する。

しかし、他に重世が紀白とする資料がなく確認することは出来ないが、おそらくは紀白の墓石であらうと思われる。

浄教、妙教墓については、この墓石に東恕

小林 敦賀の墓碑(一)

の妻里杏、息の大布が葬られているかは詳でない。

伊吹藤左衛門の名は、元禄五年および宝暦元年の敦賀持丸番付に頭取として、また町惣代の役職をも務め、古くからの家柄であった。そして、親子ともに俳諧を嗜み、多くの俳人が、北陸行脚のときには立寄っている。

東恕は敦賀俳壇の重鎮として、多くの業績を残し、享保十九年四月三日家族門人に見守られながら、その輝かしい生涯を閉じた。

消防

甲魂碑

敦賀湾に面した静かな松原公園の一角に、大きな石碑が建てられている。高さ約四メートル、縦横約一メートルに及ぶ立派なものである。

これは消防職務中に殉職された消防士を奉祀するために、昭和二年に建てられたもので、碑には

(正面)

甲魂碑

(左側面)

正三位勲一等 濱口雄幸 書

(裏面)

昭和二年六月建之

福井県敦賀郡消防義会

とあり、石碑を囲む柵には敦賀郡消防組に所属する消防組、役員、消防士名が刻まれている。

消防組の目的は、地域住民の生命、財産を火災から保護し、また災害の未然防止、被害の軽減を図ることである。そのためにいつも危険を伴ない、負傷や疾病に罹り、止むを得ず退職することもあったと思われる。

当時の消防組織は

敦賀消防組 第一―第六部

栗野消防組 第一―第八部

松原消防組 第一―第四部

他は第一―第二または第三部に分けられて、消防組が組織されている。各部には小頭二名、消防士約三十名を配置し、これを組頭が統率する組織であった。

この碑の建立は昭和二年三月、敦賀郡消防義会で議決された。その後大阪管林局へ土地の無償払下げを申請し、同年八月四日竣工なり、除幕式が挙行された。

当日は各代議士、県議、警察署長をはじめ各消防組、遺児等が参列し、ラッパ吹奏のなかに厳かに行われた。

このように消防士には、職務上危険を伴うことから共済制度が設けられ、敦賀郡消防義会々則には

第四條 本会は会員相互の災厄を共済し：

第六條 会費 組頭 二円

小頭 一円

消防手十五銭

の年会費を納め、遺族への弔祭料、傷病による退職金、記念品などが細かに定められている。

近年は消防救急設備も発達し、目をみはるものがあるが、過去には地域住民のために、尊い人命を失い、または負傷し、これが原因で退職した消防職員もあつたことを、この弔魂碑が伝えている。

そして現在も敦賀美方消防組合の消防署、消防団によって、毎年慰霊祭が執り行われている。

豊竹土佐太夫墓

義太夫節は竹本義太夫による創始と、作者

の近松門左衛門、紀海音等による名作とが相俟って、全国的に広まり、昭和初期頃まで庶民の芸能として、大いに楽しまれてきた。

港を背景にして繁昌した敦賀においても、相当に盛んだったと思われるが、今日までその概要が伝わっていない。

現在市内に残る浄瑠璃関係の墓石は四基で、義太夫が三基、もう一基が宮古路豊後系統かと思われる墓石である。

その義太夫の墓石が元町妙顕寺にある。

(正面)

自妙院音達日浄靈

(左側面)

豊竹土佐太夫塚

過去帖によれば

天明八戊申年三月二十二日

自妙院音達日浄

と記されている。

生竹屋については文献に間々みられるが、

土佐太夫の初見は「新評判蛙歌」(宝暦十二年正月刊)に、

江戸之部 豊竹土佐太夫

うすみそて ちは大根のかはむきと評されている。

この頃は、江戸のどこの舞台で活躍していたのであろうか。現存する番付では、その名を確認することは出来ないが、あるいは二代目豊竹肥前掾門下として、芸に磨きをかけていたのであろうか。

遡って初代の豊竹肥前掾が宝暦五年三月に著した「豊曲不二符」に

豊竹肥前掾門弟之分

本所中之郷 敦賀太夫

がある。この敦賀太夫と土佐太夫との関係は詳でないが、興味の引かれるところである。

また「敦賀雑記」(文政三年刊)に

丁持町 土佐太夫

とあり、これは三代目豊竹麓太夫門下で、敦賀出身の二代目豊竹土佐太夫であろう。

松島町来迎寺野にある文政八年六月に、人形遣い笠井文十郎の墓石建立に、世話人の一人として二代目土佐太夫も名を連ねている。

麓門下の二代目土佐太夫と、表題の土佐太夫とが親戚または師弟関係にあるかは、今のところ定かでない。

しかし、これら先達の活躍と、港をもった敦賀という風土の土壌とが相俟って、明治以降の敦賀浄曲界を盛況に導いた。

その中でも、明治中頃に愛好者が結成した語遊会や、近江・長浜の義太夫会との交流、個人では鶴沢寿造、同時四、豊竹土佐太夫、竹本越竹軒、坂野梅寿、花柳界においては、稲上龍吉、中上愛之助などの名がよく知られている。

この天明八年三月に没した豊竹土佐太夫がもつとも古く、敦賀浄曲界の草分けといふべき太夫である。

参考文献

- 越前俳諧史誌、加越能古俳書大観、越前の古俳諧、敦賀郡誌、福井新聞、福井県消防三十年史、敦賀郡消防義会々則、義太夫年表（近世篇）、音曲双書、敦賀市史（史料篇第五卷）、近世邦楽年表（義太夫節之部）、浄瑠璃評判記集成（上）、人形浄瑠璃系譜（太夫の部）、敦賀長者鏡集（敦賀叢書）